

性感染症に関する事業等について

様々な性感染症と感染症法の位置づけ

性感染症に関する特定感染症予防指針の対象疾患

	疾患名	感染症法上の位置づけ	日本性感染症学会「性感染症診断・治療ガイドライン」掲載疾患	WHO 主な性感染症として掲載
1	梅毒	五類 全数	○	○
2	淋菌感染症	五類 定点	○	○
3	性器クラミジア感染症	五類 定点	○	○
4	性器ヘルペス	五類 定点	○	○
5	尖圭コンジローマ	五類 定点	○	○
6	性器伝染性軟属腫		○	
7	膺トリコモナス症		○	○
8	細菌性膺症		○	
9	ケジラミ症		○	○
10	性器カンジダ症		○	○
11	非クラミジア性非淋菌性尿道炎		○	
12	軟性下疳		○	○
13	HIV感染症／エイズ	五類 全数	○	○
14	A型肝炎	四類	○	
15	B型肝炎	五類 全数	○	○
16	C型肝炎	(ウイルス性肝炎として)	○	
17	アメーバー赤痢	五類 全数	○	
18	疥癬			○
				他に30種類の菌、ウイルス等ありと記載

感染症発生動向調査(サーベイランス)について

感染症法(第12条及び第14条)に基づき、診断医療機関から保健所へ届出のあった情報について、保健所から都道府県庁、厚生労働省を結ぶオンラインシステムを活用して収集し、専門家による解析を行い、国民、医療関係者へ還元(提供・公開)することで感染症に対する有効かつ的確な予防対策を図り、多様な感染症の発生・拡大を防止するもの。

患者発生サーベイランス

(1) 法第12条に基づく医師の届出(全数) 76疾患

- ・ 周囲への感染拡大防止を図ることが必要な場合
- ・ 発生数が希少な感染症のため、定点方式での正確な傾向把握が不可能な場合

(2) 法第14条に基づく指定届出機関(※)の管理者の届出(定点) 25疾患

- ・ 発生動向の把握が必要なもののうち、患者数が多数で全数を把握する必要がない場合

※ 発生の状況の届出を担当させる病院及び診療所を都道府県が指定

(3) サーベイランス情報の公表(感染症法第16条に基づく)

- ・法第12条及び第14条により届出のあった情報は、都道府県、保健所を設置する市及び特別区から国立感染症研究所に設置された感染症情報センターに報告される。
- ・感染症情報センターは、患者情報及び病原体情報を集計し、分析評価を加えた全国情報を、週報及び月報として作成して、都道府県等の本庁に提供するとともに、国立感染症ホームページで一般に公表している。

感染症発生動向調査定点について

患者定点の考え方

- ・ 患者数が多く、全数を把握する必要がない感染症は、定点医療機関からの報告により発生動向を把握
- ・ 届出を担当する定点医療機関(病院及び診療所)は、都道府県が指定(法第14条、指定届出機関)
- ・ 指定届出機関は、保健所管内の人口、医療機関の分布等を勘案し、可能な限り無作為に抽出

性感染症定点の設置基準

○ 対象医療機関

- ・ 産婦人科、産科、婦人科(産婦人科系)
- ・ 性感染症と組み合わせた名称を診療科名とする診療科、泌尿器科、皮膚科

○ 定点数

保健所内人口	定 点 数
～7.5万人	0
7.5万人～	$1 + (\text{人口} - 7.5\text{万人}) / 13\text{万人}$

○ 現在の指定状況 (平成23年2月28日現在)

性感染症定点医療機関 1,042ヶ所
(内訳) 産婦人科、産科、婦人科 520ヶ所
性病科、泌尿器科、皮膚科 564ヶ所

○ 設置状況

H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22
855	897	911	917	920	916	931	946	968	971	961	1,042

各年末の設置数

(参考) 感染症発生動向調査の結果について



マークをクリックするとそのページを見ることができます



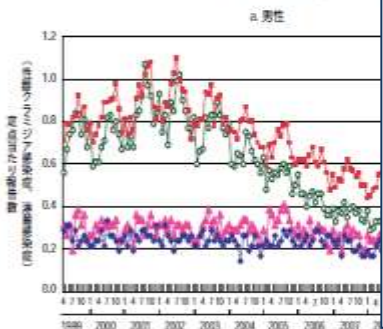
<第36週> 感染性胃腸炎の定点当たり報告数は第33週以降増加が続いており、過去5年間の同時期と比較してやや多い/ その他最新動向
 <8月> 性感染症・薬剤耐性菌感染症について

国立感染症研究所のHPで公表 (性感染症は月毎)

●若年層での推移

感染症法が施行された1999年4月以降について、若年層(15歳以下)の報告数を男女別・月別に図4に示した。性器クラミジア感染傾向がみられたが、男性では2010年に入り微増傾向がみられ、女性では2006年以降微減傾向がみられる。淋菌感染症は、男性では2006年以降微減傾向がみられる。梅毒感染症は、男性では2010年以降微増傾向がみられ、女性では2004年以降微減傾向がみられる。前月との比較では、男性では性器ヘルペスウイルス感染症で減少、尖圭コンジローマで増加、淋菌感染症で増加、性器クラミジア感染症で増加、性器ヘルペスウイルス感染症で減少、梅毒感染症で増加であった。

図4. 若年層における性感染症の年別・月別報告数(15~29歳, 1999年4月~2011年)

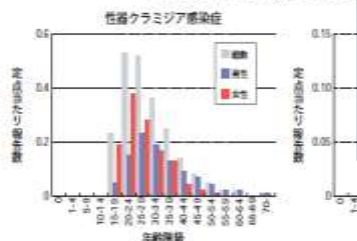


● 性器クラミジア感染症 ● 性器ヘルペスウイルス感染症
 ● 尖圭コンジローマ ● 淋菌感染症

●男女別・年齢群別

年齢群別(0歳、1~4歳、5~9歳は5歳毎、および70歳以上)は、男性では、性器クラミジア感染症は25~29歳の年齢群、30~34歳の年齢群、尖圭コンジローマは25~34歳の年齢群であった。女性では、4疾患すべてで20~24歳の年齢群すべてで15~19歳の年齢群の報告があり、男性では淋菌感染症、性器ヘルペスウイルス感染症で10~14歳の年齢群の報告あり、尖圭コンジローマ、淋菌感染症の3疾患は、男性は50代以上の報告はないか、あっても僅かである。しかし、ともに、50代以降の報告も少なくない。この年齢層は再発指摘されており、2006年4月の届出基準改正により、抗体の再発例は除外することが明示された。しかし、報告数化は見られておらず、この基準変更の周知徹底が必要と考へ、年齢群毎にみた定点当たり報告数の男女の比較では、の3つの年齢群、性器ヘルペスウイルス感染症では15~29歳、尖圭コンジローマでは15~24歳の2つの年齢群という比較的多く、他の年齢層は同値あるいは男性が多かった。淋菌感染症は年齢層は男性が多かった。ただし、性感染症定点は泌尿器科の診療科から構成されており、男女の比較については異なる。

図3. 性感染症の性別・年齢群別報告数(15歳以上)



(1月コメント)

◆性感染症について(2月14日集計) 性感染症定点数 962

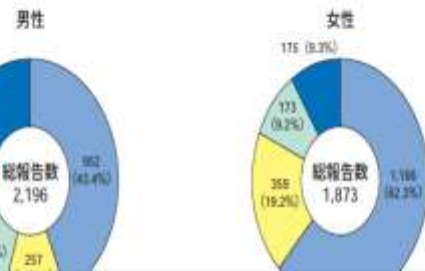
(産婦人科・産科・婦人科:464, 泌尿器科:401, 皮膚科:85, 性病科:12)

●月別推移

2011年1月の月別定点当たり患者報告数は、性器クラミジア感染症が2.20(男0.99, 女1.21)、性器ヘルペスウイルス感染症が0.64(男0.27, 女0.37)、尖圭コンジローマが0.47(男0.20, 女0.18)、淋菌感染症が0.92(男0.74, 女0.18)であった。男性では性器クラミジア感染症、次いで淋菌感染症が多く、女性では性器クラミジア感染症、次いで性器ヘルペスウイルス感染症が多かった(図1)。

前月に比べると、男女共に、性器クラミジア感染症で増加、性器ヘルペスウイルス感染症で減少、尖圭コンジローマで増加、淋菌感染症で増加した(24~27ページ「グラフ総覧」参照)。過去5年間の同時期と比較すると、女性では性器ヘルペスウイルス感染症、尖圭コンジローマでやや少なかった(図2)。

図1. 各性感染症が総報告数に占める割合(1月)



性感染症発生予防及びまん延の防止

特定感染症検査等事業

保健所において、性感染症検査(性器クラミジア感染症、性器ヘルペスウイルス感染症、尖圭コンジローマ、梅毒、淋菌感染症の5疾患から自治体が選択)を実施し、性感染症検査の前後には相談指導を行うために、都道府県政令市、特別区に対して、国庫補助を行っている。(補助1/2)

普及啓発事業

都道府県等が、正しい知識を普及させるために講習会の実施やポスター等の作成を行うために、都道府県等に対して、国庫補助を行っている。(補助1/2)

性感染症相談事業

平成18年度から直接対面による相談が受けにくいという性感染症の特性に鑑み、(財)性の健康医学財団に委託し、医師、保健師等による電話相談事業窓口を設置し、国民の相談に対応している。

平成22年度は(株)保健同人社、平成23年度は(株)T-PECが実施している。

(参考) 特定感染症検査等事業の推進

厚生労働省

オレもってるかも。

今、性感染症が若い世代を中心に広がっています。
性行為でうつるこの病気は、かかったことに気づきにくいので、
男女を問わず、誰もがうつされたり、うつしたりする可能性もっています。
「自分には関係ない」と思わず、気になったらすぐ検査や相談を。

だから話そう、
だから聞こう。
Please ask and talk about it.

保健所なら、性感染症の
検査や相談を匿名で受けられます。

各自治体へポスターを配布
(平成23年3月)

厚生労働省HPにも掲載